

英語習得の「常識」「非常識」 ——第二言語習得研究からの検証

白畑知彦 編著
若林茂則・須田孝司 著

横田秀樹
(三重県立四日市高等学校教諭)



本書は、第二言語習得研究の分野で世界的に活躍する3人の著者により、当該分野の最先端研究をもとに書かれたものである。

世間の一般常識の中にも事実であるものとそうでないものがあるように、これまで英語教育において「常識」と言われてきたことの中にも疑うべきものがある。

「文法は教科書で習った順に覚えていく」のか？「外国語学習は音声から導入されるべき」か？「教師が誤りを直すと効果がある」のか？ こういった英語教育に携わる者にとって「常識」とされることに關して、本書は第二言語習得研究の客観的視点から検証し、その真偽を確かめていく。「俗説」と「第二言語習得研究の知見」の違いは、実証的なデータに基づき、論理的に反証可能な形で示されているかどうかという点である。そのような「俗説」の根拠を確かめる姿勢が本書には貫かれている。

一方で、本書はもうひとつの「第二言語習得研究への入門」という側面も持ち合わせる。言語習得研究と言語教育研究は、互いに関連しながらも全く異なる目的を持った別の研究である点に言及しながら、第二言語習得研究の面白さと楽しみ方を訴える。例えば、第6章では、英語耳や右脳学習といったことを銘打った宣伝文句のような巷に広がる「常識」とされる内容の信憑性を確かめたり、某テレビ番組での子音と母音の比較研究の矛盾を指摘(第7章)したりするなど、言語習得研究の醍醐味や基本姿勢を示している。筆者が言うように第二言語習得研究と英語教育の目的は異なるが、我々現場の教師が、その二者を結びつける研究を進めていくのも面白いであろう。

第二言語としての英語習得は、本来多くの時間を必要とするはずであるが、我々中高の教員は限られた英語の授業時間を効果的に使う必要がある。また、英語は、時代とともに授業方法を考え直す必要に迫られることも多い。そのような中、我々英語教師は、「俗説」に振り回されず確かな目を持って次の授業の改善を図っていききたい。日々授業の工夫を重ねている先生方には、是非とも本書を手にとり読んでいただきたい。特に英語教育と直接関係するのは、第2章「学習者の習得順序と外国語の学習法について考える」、第3章「学習者の誤りについて考える」、第4章「学習者要因について考える」であろう。本書から得られた知見をもとに、自分の授業を次はどのように変えてみようかと考えるだけで楽しくなってくるはずである。

教室で読む英語100万語 ——多読授業のすすめ

酒井邦秀・神田みなみ 編著

酒井良介
(私立武蔵高等学校・中学校教諭)



本書の編著者の一人、酒井邦秀氏が提唱する100万語多読学習法は近年大きな関心を呼んでいる。氏は本書の第1章で教員の役割として「多読指導三原則」((1)教えない、(2)押しつけない、(3)テストしない)を挙げている。

いずれも学校での英語教育には相容れないようにも思われるが、この三原則に則って多読を授業に取り入れるにはどうすればよいのか。第2章では、教室での個人指導のあり方から、必要な図書の冊数・予算、本の陳列方法(写真付き)に至るまで、具体的な提案がなされている。

一方、現場の教員としては様々な環境での実践報告を聞いてみたいという願望がある。教室での多読となると、その原則や効果以外に気になる点がいくつもあつたのだ。本の準備以外にどのような準備が必要か、評価をどのようにすべきか、予想される苦労や問題は何か

か、などはその最たるものであろう。

本書の第3章では学校現場における多読実践例が詳細に紹介されており、上記の疑問にも真正面から答えている。とりわけ成績評価についての報告は興味深い。大学の授業では出席や英語運用能力試験の結果を参考としたり、高校や高専のように外部試験を導入できない環境では、多読の方針に合った読解力試験を行ったり、読書記録やサマリーを提出させたり、と現場の悩ましい対応が伝わってくる。

第4章では「多読指導のひろがり」として主に社会人と小学生以下を対象とした実践報告が並んでいる。この章に最も多くのページが割かれているのは、学校の英語教育での多読指導に多くの制約があることを反映しているようにも思われる。ただ、高校や高専でも有志の生徒によるサークル活動から始めた例も紹介されており、学校外の指導例はこのような課外活動形式での導入に大いに参考になるであろう。

これまで多読の奨励書といえ、多読の長所だけをひたすらに説くものが多かった。しかし、昨今の多読ブームのなかでは、本書のように誠実に現場の声を伝え、教室での実践に伴う問題点やその解決法を示していく姿勢こそが、学校現場に多読を浸透させていくための鍵となるのではないだろうか。

同時に、本書の編著者らが展開する多読学習法のプロジェクトは学習者と指導者の実体験をもってその効果を物語っているが、欲を言えば、今後は並行して多くの実証的な研究報告がなされることも期待したい。

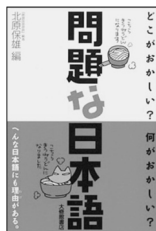
問題な日本語

——どこがおかしい？ 何がおかしい？

北原保雄 編

高草真知子

(麗澤大学・麗澤中学高等学校講師)



麗澤中学高等学校では、クラスの学級文庫に一冊ずつ『問題な日本語』を置いている。中学ではまだ早いかと思ったが、『毎日中学生新聞』にも取り上げら

れたし、何よりこの本の4コマ漫画(いのうえさきこ画)がおもしろいので、この漫画を読むだけでも、最近の日本語のちょっとおかしい表現に気づいてくれるだろうと考えたのだ。

My favorite 4コマは、「こちらきつねうどんになります」。タオルを持ったきつねが、どんぶりに入ったうどんの湯加減を見て、うどんの中にちゃぶんちゃぶんと入っているところ。何度見ても煩ざりしたくなるほどかわいい。「こちらきつねうどんになりました」と店のオパハンが言うのが最後のオチなのだが、客の腹巻をしたオヤジが「正確だな」と無表情に言うのも笑える。

ファミリーレストランなどでよく聞かれる「こちら和風セットになります」という言い方。「ええっ、いつのまに和風になったのよ。前は洋風だったわけ？」とツッコミを入れたくなるが、実はこれはお客様に対する店側の謙虚な姿勢の表れなんだそう。この「こちら和風セットです」よりも丁寧で畏まった表現として、「こちら和風セットになります」を用いているという。でも、「なる」には、〈新しい状況の出現〉、〈非人為的〉、という意味があり、「和風セットになります」は、やはりおかしい。「和風セットでございます」が正しい接客表現だとか。これなら私的にはOKです。(ちなみに「私的には」も問題のある表現。詳しくは71ページを見て。)

さて、高校三年生の秋ともなると、大学入試の面接指導が始まる。あるとき生徒が「私の志望動機はそれとは違うくて……」と言うので、「違うくてという言い方は変よ」と言うと、「ええっ、ダメなんですか。どうして。みんな使ってますよ」と言い返してきた。「えーと、どうしてだろう……」と、口ごもる私。

そのほか、「貴校の建学の理念に感銘を受けました。なので、志望します」「施設がすごい立派で、こっちの方が全然いいと思いました」「っていうか、大学生が親切だったので、すごい親しみ持てるっていうか」「その分野にはなにげに興味があつたので」なども、気になる言い方である。でも、なぜおかしいのか、本当に誤用なのかはよくわからない。その疑問にわかりやすく答えてくれるのが、この本なのだ。だから、教室に一冊あると便利である。